

友好の輪をひろげよう

日中友好浄土宗文化交流協会発足

善導大師遠忌事業として

善導大師の千三百年遠忌(昭和五十五年)法要を機会に、大師の顕彰を計画している本宗では、事業の一つとして日中友好浄土宗文化交流協会を結成することになり、さる八月四日にその役員会を開いた。

この協会は、有縁の人々に呼びかけて広く会員を募り、当面の問題である日中友好運動を行おうとするもので、まず正しい中国の理解のためのいろいろな計画とともに、善導大

師の遺徳を顕彰するために、中国に参拝団を送り、大師ゆかりの地である西安その他を訪問するなど、具体化が進められている。

目下、理事長に塚本善隆博士、副理事長に太田秀三師をいただき、また理事には藤堂恭俊師ら十一名の人物を選出して、まず役員構成を考えたが、これによつていよいよ積極的に文化交流の第一歩を踏み出すことになる模様である。

仏教哲学の論文

故国に帰る

異国で死んだ北山淳友師の遺文

本宗には昔から海外留学生制度があつて、立派な僧侶、特に学問の道に生きる僧侶をつくるために、何人かの人を海外に留学させる習わしがあつた。

市にある教念寺の法嗣となつていた北山淳友師は、大正大学を大正十三年に卒業後、すぐさまドイツに留学してマールブルグ大学に赴き、そこでヨーロッパにつたわる仏教哲学の研究に励んだ。やがてドイツの哲学博士の称号を受け、

フルトフスキー夫妻と北山宏明師



大学教授の職にあつたが、今次の大戦のために戦禍をさけてチェコスロバキアに移り、同国のプラハ大学の教授となつた。しかし、同国が共産主義国であるため日本への帰国もむすかしくなつたまま、病を得て、昭和三十七年、五十八歳で異国の土と

お彼岸の起源は、古く平安初期に遡り、一宗一派に限定されない通仏教的な行事として、全国に行きわたりました。実に千有余年の歴史を基盤とした、この彼岸の風習は、早く平安中期の代表的文学である『源氏物語』や『蜻蛉(かげろ)日記』にも記載され、またさらに『ことわざ』や『地口(じぐち)』などにも多く用いられているように、古くから庶民生活に奥深く浸透し、趣きゆたかな風俗習慣となつております。たとえば、移りゆく季節感と結びついて「暑さ寒さも彼岸まで」といひ、また

彼岸に思う

活である「此の岸」に対して、悟り・安養・不生不死の涅槃(ねはん)の生活である「彼岸」を意味するものです。仏教の最高最深い境地を「中道」あるいは「中

と申しますが、これが彼岸の本質的な内容であり、一切の片寄つた見解(みかた)や、一方的な行為を拒否し、あらゆる偏執(とらわれ)を超えた中道の境地に安養浄土の世界が現れます。そして釈尊は、苦行主義でもなければ享楽主義でもない般若の智慧を、中道の道として示されております。

(加藤秀善)

善導大師遠忌・法然上人降誕法要

啓蒙の垂れ幕を作製

近畿地方教化センター

浄土宗近畿地方教化センター(漆間純成委員長)では、近く迎える善

導大師の千三百年遠忌と法然上人降誕八百五十年慶讃法要を、一

般檀信徒に認識してもらおうと、垂れ幕を作製した。タテ一九〇センチ×ヨコ四〇センチ、白の木綿地のこの垂れ幕は、二種類用意され、一つは同センター名記入のもの(写真)、他方はこの箇所が無地で、各寺院の名称が記入できるようにしている。

入用希望のむきは、大阪市北区東寺町十一・九品寺中・浄土宗近畿地方教化センターまで。頒価一幅一千元(送料別)。

夏に鍛こへる

よい子の集いを

山口教区で開催

こともたちの健全な育成を目的として、夏休みの期間中、知恩院をはじめ伊勢や伊賀の両教区など、各地で恒例のよい子のための研修会が盛大に行われた。

昭和五十五年 高祖善導大師一三〇〇年遠忌 昭和五十七年 元祖法然上人降誕八五〇年慶讃

浄土宗近畿地方教化センター

読書のすすめ

ここ三ヶ月ほどの間に、送られてきた寄贈図書から、読書の秋にふさわしい二、三の書を紹介する。

すばらしき復活(田中一良著)

頰に犯されて三十年、死闘の末、奇跡的に全快、社会復帰を果たした鈴木重雄の全人生を綴る。一、二〇〇円。すばる書房刊(東京都文京

区水道一五二四) 生きる限り(野島宣道著)

本紙俳句欄選者としておなじみの著者が書きためた布教法話集。一三〇〇円。探究社刊(京都市東山区清閑寺山内町四六ノ五 中住ビル三F)

嵯峨野誓願ノート(長沢普天編)

嵯峨野清涼寺に備えられている「誓願ノート」から抜萃した若者たちの心情吐露集。八五〇円。地

産出版刊(東京都渋谷区神宮前六一 12-18)

田中木又上人遺文集(藤堂俊章編) 并栄聖者の直系である木又上人の歌と教話を集めたもの。光明修養会刊(神戸市東灘区生田町二一 26 東極楽寺内)

花びらの心(高橋良和著)

生きる喜びを中心として女性向けに綴つた児童文学者の随想集。一〇〇〇円。探究社刊(前出)

なさんも奉仕して、二泊三日の研修会のプログラムをミッチリと消化したが、参加の小・中学生からも非常な感激が寄せられた模様で、それぞれの地域における児童教化の振興に大きな役割を果たした。

